

昭和二十五年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第十二號）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈

光

第二卷・第三號

目

信仰體驗錄……………故・安波動八（1）

感恩卽報恩……………山下成一（7）

仰ぎましようよ慈光……………松村繁雄（10）

入信の經路……………柳川平七（13）

次

信仰體験錄

故安波勳八

凡てが肯定せらるる世界

熟々顧みるに、誠に不思議である。私の様な臆病者が死を宣告せられても、一度も眠られねこともなし、その爲に一度も飯を食べない事もない、患者を診る気分も平常と少しも變りはない、主治醫が「信仰の力の偉大なるを安波に於て初めて見る」と言われたという話を聞いて、私が外観上ビクともしなかつたことがわかる。少し食べ過ぎてお腹が痛む時だけ痛いだけのことである。身体をえびの様に曲げて暫時横になつているとよくなる。それからドン／＼働ける。遺族のことも心配になる、然し心配になるだけの話で、それが爲に私の心が亂されることはない。これは世間的には誠に横着な話で、遺族の計も立つて居ないのに三人の子供を頭の弱い妻に託して心配にならぬ方が嘘である、自分でも時々頭が馬鹿になつて居るのではないかと思ふ位である。

私に信仰がなかつたなら今頃どんなになつて居るであらうかと、思い出してもぞつとする。斯く今日の力強い生活をさせて貰うて居るのは全く信仰のお蔭である。斯くお蔭でよくなる、お蔭で喜べる様にして呉れる力を假に積極的慈悲と名付けて置こう。この積極的慈悲が如何によく頂かれても私は安心が出来ぬ。親のお慈悲に就きてもそうである。親が私のことを思いづめに思うて下さるお蔭で私は

損つて居るからである。自分と云ふ奴は信仰に徹底しても愈々の時はびくつく奴である、喜べぬ奴である。

初めて主治醫の診断を受けた翌々日、妻が「あなたは末綱先生に診貰つてから只の一日でげつそり瘳せて顔が蒼白くなつた」と云うのを聞いて、自分では全く平氣で居た積りであるが矢張りびくついて居たのか、絶対的慈悲を受けて居ながら愈々の時はびくつくなさない私である、かような私であることをかねて知らしめして、かような淺ましい私をお見捨てなきお慈悲に氣付かして貰うて見れば喜はずに居られぬ。

又福岡の大病院で死の宣告をされた時、自分では全く平氣の積りで居たが、室に歸つて書物を讀むと、どうしても頭がまとまらず、約四十分間程意味がとれなかつた。唯一の望みとして居る手術も試みられぬと投げられては眼のくらむ奴である、びくつく奴である、かかる淺ましいなきこの私をお見捨てなきお慈悲に氣付かして貰うて見れば、成程そうであつたか、成程そうであつたかとなつた。

この積極的慈悲が私の本當の生命であり、力である。

消極的慈悲とはお蔭で喜ぶ様になつた、お蔭で結構な日暮しが出来る様になつたとなられる方であるから積極的と名付け、消極的慈悲とはいくら佛の慈悲を受けても喜ばれぬ、愈々の時はびくつくこの私をお見捨てなきお慈悲で、なられぬ方であるから消極的と名付けたのであるが、愈々の時にはこの消極的慈悲が私の本當の力となり、生命となる、この意味に於てこの方が積極的慈悲であり、絶対的慈悲である。

この積極的慈悲が私の様な奴に届いたことは誠に不思議である、

今日結構な日暮しをさせて貰い、生活にも不自由なく、不具でない身体を貰うて居る。この積極的な親のお慈悲丈では親に不平がある。

自分より遺産を余計貰うた人を見て羨しがり、胃痛にかかつてみれば、どうして他の人の様に丈夫な身体を呉れなんだろうと思ふが出る、これは不平が出るのが當り前である、親心の全体を頂かぬからである。親の消極的慈悲が分らぬからである。私の謂う消極的慈悲とは、いくら親が心配して呉れても私は金持にならぬ、私の胃痛はよくなる、この金持になれぬ、よくなるならぬ病氣を持つて居る者を「さぞ彼奴が困つて居るだろう、泣いて居るだろう」とこのよくなるられぬ奴をお相手下さるお慈悲である、この積極消極兩方のお慈悲が親のお慈悲の全体であり、この全体のお慈悲が私に届いて見れば親に對する不平はない。結構なる日暮しが出来るにつきても親の御恩を喜び、不治の病を得たにつきてもこの者を相變らず相手にして呉れ不治の病を持つて居る私の爲に心から泣いて呉れる親心が有り難い、親に不平のあらう筈がない。

お蔭で喜べる様になつた、お蔭で結構な日暮しが出来る様になつたと、なられたことのみを喜ぶのであつたらその喜びは如何に大であつても、愈々の時、實際問題にぶつかつた時役に立たぬ。毀れてしまふ。それは佛の慈悲の全体が届かぬからであり、所謂佛の消極的慈悲が分らぬからであり、一方から云うと自分の本當の姿を見近くは近角先生と東陽和上の二人の善知識の御恩、間接には私に關係する一切の人及事物即一切衆生の御恩、換言すれば佛心の顯現に外ならぬのである。

この積極消極全体のお慈悲を頂いてみれば不平などは毛頭ない。斯く生死巖頭に立ちてびくともせぬ力強い生活を爲すことが出来るについては佛の慈悲の廣大なるを喜び、愈々の時はびくつく奴である、喜べぬ奴である、斯かる淺ましいなき者をお見捨てなきお慈悲に腹ふくらせられて如何なる逆境も難なく越えさせてもらうことが出来る。喜べるにつきても南無阿彌陀佛、喜べぬにつきても南無阿彌陀佛、誠に仕合せである。私は「信仰の世界は三世に亘り凡てが肯定せらるる世界なり」と信ずる。佛の慈悲の分らぬ間は兎角世の中に合點のゆかぬことが多い、佛様が絶対的慈悲を持ち絶対の力を持ち居るなら私の胃痛をよくして呉れそうなものだなんて考える。ある人が私の胃痛は私の強信の不思議力で世間の例を破つて必ず治ると信ずると云われたに對し、私は信仰の力で不治の痛が治ることが不可思議力ではない、信仰の力を以てしても治らぬ病氣を持ち居ながら、かく結構な平靜な生活をさせて貰えることが不可思議力であると答えたことがある、自分が専門以外の學科に手を出すまいと心掛けて居るについては他の専門家が専門以外に手を出すすと都合だなんて考える、難治の病人に全力を盡しても結果が悪かつた時病人が當方の努力を見て呉れぬで結果が悪かつたことを不平を云うと癪に觸れる、數え来れば限りがない、要するに人の世は不可解であり、自分は不平不満そのものである。

然るに佛の慈悲の全体が届いて見ると、自分の心の問題、身体の問題、家庭の問題、社會全般の問題、未來の問題が皆うなつた。

につきても成程そうか、喜ばれるにつきても成程そうか、手遅れし
たにつきても成程そうか、醫者の治療により榮養がよくなつて肥え
て来たにつきても成程そうか、三面記事の悲劇を見ては成程そう
か、家庭にこた／＼が起つたについては成程そうか、円満に行かれ
るについては成程そうかと、凡てが受け入れられる世界が念佛の世
界である。お慈悲の届かぬ世界は自分に都合のよいこと丈が受け入
れられる世界である、佛の慈悲を頂くことによつてのみこの人生に
凡てが肯定せらるる世界を現出することが出来る。

凡てが肯定せらるる世界に導かれたる自分は幸福である。是から
先浦みが増して来、食物が通らなくなり、愈々の時はどんな見苦し
い態を現わすかも知れぬが、それによつて私の首肯の世界は變るこ
とはない。

南無阿彌陀佛を意譯すると「成程そうだ」であると感じたことが
ある、今でも左様思つて居る。誠に「信仰は三世に亘り凡てが肯定
せらるる世界なり」であり「念佛は三世に亘り凡てが肯定せらるる
世界なり」である。

妹の死

「死の宣告を受けて」より

和上様！
かねてお心にかけて下さつた妹は昨日の朝二時半頃、とう／＼死
にました。ハツを頭に三人の子を残してこの世を去りました。

和上様！この通知を昨日の朝五時半頃床の中で受けました。葬式
は夕方に取り行つた事ですが取り敢えず使の者と一緒に雨を冒し
て鐵輪に向けて出發しました

和上様！
「兄さん、
先生、除けて呉れと云うのに」と八釜しく云うのです。その他同じ
言葉も幾度も繰り返し、私の名を呼ぶのです。隣の室で私が手を洗
うていた時も、兄さん、先生と呼ぶので側の人が氣をきかせて、ふす
まを閉めて呉れたのをよいことにして私は下に降りました。

和上様！
これが今生の別れとなつたのです。
和上様！
この病人が何時変が来るか分らぬと云う事を私は理屈
の上からはよく知つて居ましたが、これが實際になつて居なかつた
證據です。このものが實際になつて居たらば、別れの時は何時で
も、是が今世の別れになるかも知れぬと考へれば、病人は病氣の具
合で、どういふ態度に出ても、優しい言葉の一つも残して歸つた筈で
す。

和上様！
私共平常元氣な時は死の問題等は重き病にかかつて行
き詰つた時に起り其時でなければ解決出来ないのかも知れぬと思つ
たは間違です。實際私がもう立つ事の出来ぬ重き病に面して、理屈で
は死の覚悟をすべき境遇に際しても實際には、いつ死ぬかも知れぬ
とは考へぬ、まだ／＼と思つて居る内にさらばになるのではあるま
いか、従つて重い病にかかつても、愈々窮したとは考へず、死生問
題の解決は其時を待つべきでなく、この只今健康な自分が、實際何
時死ぬるか分らぬ身であることに氣付いて死の問題を解決するにあ
らずんば解決すべき時はないことを感じました。

第二に私は妹の病氣の爲にお淨土の存在がはつきりわかりました
話は病中の時に戻ります。病の始め四五日にして意識を回復して他
人の云う言葉はわかるが、自分でしゃべることの出来ぬ状態の時
でした。姉がお前の注射を一本してやつて呉れと私に申すのです。そ

途すがら私の頭は妹の死と云うこと以外には向きませんでした。
然し一向に悲しくもなく恰も水崎で朝早くお話を聞いて宇佐殿まで
歸る時の氣分と少しの変わりもなく、唯自らそうだなあと、感慨に満
ちた頭の状態で私の思索は續きました。あたかも一人で歩いている
かのように。

和上様！私は実の妹を失つて見舞に行くその時でさえそんな事を
味わり余裕のある程冷い淺ましい人間です。かような者を相手にし
て下さるる親様は有り難いものです。

その時に浮んだ感想をそのまま忘れぬ内に筆にして御教化に預り
度いと思ひます。

一番に私は人間は如何に行き詰つても行き詰つたと感ぜぬもので
あることを覚りました。

妹のこの度の病氣は始めから重体で回復の見込は殆んどなかつた
のです。中頃榮養が少しよくなりましたから絶対に駄目だと思ひ
ませんでした。病氣から云うても榮養状態から云うても、何時如
何なる変があるか分らぬことは素人でも想像のつく程でありまし
た。専門は違ひただ傍觀の態度を取つて居る私にも勿論さように心
得て居た筈なのです。然るに今計報に接して見ると成る程私が實際
にはあの病人が何時死ぬか分らぬと思つて居なかつた事が明瞭し
ます。

最後に病人を訪ねたのは、死んだ日の前々日の日曜でありました。
容體が悪いと云うので末綱君のお伴をして行きました。初め見た瞬
間に顔の形相が變つて居るのに驚きました。熱が高くて呼吸が苦し
くあります。病人は少し荒々しい言葉で何事でも強いるのです。無
論頭のせいです。胸の側にある綿をつかまえて「鼠が居る、除けて呉

の意味は耳の聞える内に佛の慈悲を話して聞かせよとの事でした。

「もうこうなつてから分るものか、平常達者の時に一生懸命に聞い
ても分らぬことが意識が回復したとは云えホンの少し宛しか理解出
來ぬ程度の頭で分るものか」と申しました。次の日、母が今の内に何
んとか話して呉れよと申します。私は「私がお慈悲などをこの病人
に知らせる方があるものか、五六日前までは大元氣であつたものが、
今はすでにかかる有様だと云う事をこの私に事實を以つて知らせ
て呉れるのが有り難いではありませんか」と答えました。姉に答えた
ことも母に答えたことも私の實感です。然し妹にお慈悲の話せな
かつたのは今一つの理由があつたのです。それはお淨土と云う意識が
私にはつきりして居なかつたから、その際私には申す言葉を見出し
得なかつたのです。この事は和上様に訴えてお教えを乞うた通りで
す。私としては死んだら極樂があると、はつきり分つて死んでもか
まわぬ、佛様の力で極樂に參られると思へたなら話されるが、その
意識がないから云えないかと考へたのです。

是について和上様の教えを乞ひ、その日の終列車で鐵輪に參り、
翌朝頭のよい時に佛の恵みの廣大なることを話す積りでありまし
た。生憎病人が眠りから覚めなかつたので話さずその儘歸りまし
た。(その頃は四五時間續けて眠り、時々眼を覺ました時は意識が
稍明瞭にあつた状態でした)矢張り私のこうしたいと思つた方は話
されぬと云う事を座談會の席で申し上げました處、皆々私の無情を
責めました。その時の和才大尉のお言葉が私によくはりました。

和上様！私は極樂があるか、ないかと云うことは學問としては知らぬ
が、信仰の上からは確かにあると斷言出来る」
私「私にはそれが出来ぬから困つて居る、話されぬのです」

和「この私を何時でも引き受けて呉れる人のあると云うことが極樂の有ると云う事ではないのですか、何もお前は到底助からぬとか何とか云うて病人を驚かせぬでもよい、何ともしようのない者を見棄てぬ(何時でも、如何なることがあつても)と云うお慈悲のましましことを話したらよいではないですか」と申された時に、豫て問題になり、和上様が御心配下されて居り、私が吾儘申して居つた極樂がはつきり私に分りました、私は和上様に感謝致しました。

そうだ、極樂が何處にある、どんな所だと云う事は学問上の事だ理屈の事だ、このなんとも仕方のない私を、何時でも救うて下さる佛の存在すると云う事が、この世では安心立命の生活の出来ることであり、この世を去れば極樂の世界だと云うことだ！

お慈悲の上からはこの世と極樂との区別はない、唯人間の身体をしている間が娑婆で人間の身体を失うた時が極樂だ、生きようが死のうが、地獄におちようが、極樂に居ようが、この私を何時でもお相手にして下さいのお慈悲のおわしますことに間違いない。

第三に親の慈悲を通じて佛のお慈悲を仰ぎました。
妹の夫の介抱は至れり盡せり、側の見る眼も羨しい位でした。夫なる人は「不具になりてでもよい、馬鹿になりてでもよい、生かしておきたい」と申されたことがあるそうです。
榮養が大分よくなつて、頭の方が変になつて、この分では精神に異状のあるままでよくなるのではないかと母は思われた時の事でした。「馬鹿になつて生きていても、皆様に迷惑をかけるし、本人も苦しいであろう、むしろ死んだ方がよい」と申されたに對し、私は私共の力ではよくする事も出来ぬ代りに、悪い方にする事も出来ぬ、實に人間の力には不甲斐ないものです。私共の思わぬ力で形づいて行つて居るのですと答へましたが、今この母の言葉を思い浮べ

氣分は平靜と少しも変りはありません。夕方少し早目に止めて葬式に參つてもモ一涙も出ません。
和上様！ 妹の最後は甚だ立派であつたことを聞いて私は喜しくあります。兄が後のことは皆が世話をするから心配するなと申したら、極めて平靜でお念佛を稱えて眠るが如く往生したそうでありませぬ。
和上様！ 平常お心にかけて下さいました私の死生問題がかよう

源信僧都の御歌

よもすがら佛の道をもとむれば

我がこころにぞたづねいりぬる

大空の雨はわきてもそそがねど

うるふ草木はおのがさまく

我だにもまづ極樂に生れなば

しるもしらぬもみなむかへてん

て母の慈悲の廣大なるを仰ぎました。「一寸聞くも馬鹿になつても生かしておきたいと云う夫の願ひの方が大きな慈悲の様であるがそうでない、馬鹿になつて生きる位なら死んだ方がよい」と妹の死を希う母の方がお慈悲である。夫の慈悲は子供の爲を思い、自分の爲を思ふのであるが、母の慈悲は妹の爲を思ふ以外何ものもない、妹の爲を思へばこそ、どうしても頭の方が回復せぬ位なら生かして長い間苦勞させるより、早く死なせたいと祈つて下さるのです。
病人の心持としては夫の願ひを喜ぶでしょう、馬鹿になつても生きて居たいでしょう、然し本人の幸福ではありません。本人の本當の幸福は馬鹿になる位なら、この世を失ふことで母の願ひの通りにあることです。母の心は慈悲に相違ありません。

私共病氣をしたり、災難に出遇つたり所謂人生の逆境に遭遇すると、ひたすら病氣災難から逃れること許り考へる、然しこれは私の方から希望する事で、それが私の幸福かどうかはわかりません。唯私の望む通りになることが私の幸福ではありません。佛は何時でも私の幸福を念じ、私を仕合せにしてくれて居ます。行住坐臥私の至幸を念じ、私を護つて下さるお慈悲のましますことが有り難いのであります。

和上様のいつもの御教化下さるる人生の逆境に際して絶對の境地に立ちてビクともせぬ境涯が味われます。
和上様！私は妹の死の見舞いに行く途すがらこんな事を考へる余裕のある冷い人間です。それにしても鐵輪について佛前に參つて居る姉に會うた時は唯涙丈でありました。二階で母や、夫や、兄や、その他に近親に護られて靜かに眠つて居る妹の顔を拜した時は、唯々涙のみ、挨拶も疎に出来ませんでした。
和上様！ 然し唯其丈であります。急いで歸つて患者を診て居る

にらくらくと片附きました事は誠に意外であります。是は全く妹がかような急病にかかつて呉れ、身を以て致して呉れたお蔭に相違ありません。平常お心に懸けて下さつた御親切が届いたからに相違ありません。何時でもこの私をお護り下さるお慈悲の顯現に相違ありません。誠に有難くあります。

「隨感録より」

曉のかねのこゑこそ嬉しけれ

長きうき世の明けぬとおもへば

妙法のただひとつのみありければ

またふたつなしましたみつもなし

さとりえて思いとく目にあひぬれば

ほどなく消えぬ罪のあわ雪

感恩即報恩

山下成一

私は如來大悲の恩徳を感戴する事と、その高恩の萬一に報謝し奉る事とは、必ずしも一致しないように覺えて落付かない感が残つて居た、又殊に稱名が直に報恩になるとの祖聖や蓮師の御慈訓に對してもどうもすこし割り切れないように思つていた事を茲に告白し、拾数年前、よくこのことを反省せしめられて始めて、感恩は即ち報恩であり、念佛申すことが直に感恩である事、又信に生き念佛に裏付けられた凡愚人の業生活をそのまま報謝の大行に轉じて下さりある事を知らされて、多年の迷妄が一時に晴れて、割り切れないものが悉く清算されたのであります。

省みれば私自らの限らない愚悪性により、極りなく煩惱するより外ない私を、その故に不憫と思召し、どこ／＼までも救われねばおかぬとの佛陀の大慈悲心を感戴せしめられて見れば、茲に初めて不思議にも愚悪性そのままに底ぬけの大安心を惠まれて、歡喜の情おのづから湧き出るにつけても、かかる海山の太恩に對し如何にしてもその萬分の一をも報謝し奉らねばとの至情が勃然として湧き出るのであります。その報恩の方法として、祖聖は「唯能く常に如來の号を稱して大悲弘誓の恩を報ずべし」と御教え下され、蓮師また「佛恩報謝のために行住坐臥に念佛申すべきものなり」との御慈訓をくりかへし／＼垂れさせられてありますから、私は素直に御垂訓に順い念佛申すことに専注することに努めたことでもあります。然

し「常に」とか「行住坐臥」とか又「寝てもさめても」とかの御文字通りには到底及びもつかぬ次第であつて、常に懈怠に流れ、終に私には不可能の事でありと唯私の忘恩と怠慢とを慚愧する外ないにしても、終に稱名退轉の故に報恩の出来ないことを屢々浩歎したのであります。

是所にも私の心内に定散自力のいみじき影が残りて居て、祖聖や蓮師の御慈訓のままに常に念佛を申し報恩し得るように思いあがり、知らず／＼橘慢の頂きに昇り、外形善に見える煩惱に私自らを苦しめつつあつたことは氣付くに到つて、如何にも根強い私の業報に驚き入つたことでもあります。

それは報謝という事を何か品物の取引するような考えで、何とか御禮を遂げなくては義理がわるいように覺え、如來より賜らせ給ひし大悲の結晶なる念佛を我物顔に握りつつその稱える数の多い丈け報謝もまた行き届くように思い上りつつも、然も他力中の自力の策勵によつての稱名が長続きもせず、終に稱名を怠りつつ悔恨の念に苦しんで居たのであります。出来ぬままではすまされず、さりとて出来る見込も立たず、終に祖聖や蓮師の御慈訓の眞意をも素直に受取り得ない事になつてしまつたのであります。

信後に起る私の苦惱、それは外形如何にも報恩の出来ぬを悲しむ殊勝氣な心です。それから始めから悪煩惱とも見えず、偽善の眞相に氣づ

くべくもありませんでした。

口稱の易行をさえ實行するにたえない私が私の身辺において他の何物を以てしても如來の思召に適うように出来ない私は全く困憊に沈んだのであります。然し数日猛省を続けた結果、心から祖聖や蓮師の慈戒を嚴守し得ざるほどの、私の忘恩且つ淺信の故に、いよいよ却つて大悲の胸を限りなく傷めさせ給ひつつあることに氣付か

させて頂くや、此の苦しみが直に消え失せて、慙々私の内心に宿る善煩惱の定散心こそ眞に私を束縛せる惡業の強い綱であつたことを悟るに到りまして、かかる奴をいよ／＼悲愍し給う無極の御眞實を感戴し泣血感謝する外なかつたので終に万事が解決するに到つたのであります。爾來私の心内に喰喰一切の煩惱を燒盡し給うて大悲に充たされた私の業身の幸慶をいよ／＼心から絶讃し奉り、念佛も自然に任せて申させて頂きうる事に轉じ來つたのであります。更に省みれば私の四十二歳の年末に始めて大悲心を感謝し得る仕合の身にして頂きし以來その法善を有縁の人々に傳えねばならぬように

思い上り、己の淺信且つ未熟なるを省みず、私の信えの経路を赤裸々に申し上げ、一方に私の心に起る淺い懺悔の情を語り、他方に此罪塊を救う大悲を感佩しつ／＼三十有年に及びましたが、此の私の恐ろしき征伏欲に充つる惡毒な暴言を通じて私の周圍に幾多の御同朋を惠まれるに到つたのは、全く他力の大行が私の罪塊を通じて私を救わせ給うと同時に、私の有縁者を直接靈化し給う事となり、かくて不可思議にも私の此の惡業そのものが直に報恩底の大行に轉ずる事になつてゐるに頂き來つたとき、私のいささか乍ら佛恩を感戴してゐる事實が佛力の故に直に幾分の報恩になつてゐることを知らされて、感恩と報謝とは何れも他力廻向の賜に外ならず全く同時であつた事に氣付かせて頂いたのであります。

今は私が本願の名号を私しこれを稱えて佛恩に供し奉る非禮を戒め、本願の名号によつて始めて私が久遠劫の初事に救われまつりし喜びの心が自ら發して念佛として私の口からあらわれて下さる事をしみ／＼渴仰するのみであります。大悲の願船に乘せられた私は唯光明の廣海に浮び至徳の風を靜かに仰ぐ外ないので、自方の力で船を後押しする要もない事でもあります。かくの如く憶念念佛せしめられて見れば、稱えることの多いとか少ないとかいふ事を忘れて一路念佛に生かされて行く外ないのであります。

且つ私の信後の行爲一切は相變らず愚悪性を出ていないのであります。心光の照護によつて不思議にも愚悪のままにその愚悪を氣にやまぬ妙消息を滿喫しつ／＼あるのであります。蓋し私は死ぬるまで私の罪業に任せて生きるより致し方ないのでしようが、唯他力よりの恩澤の故にその行爲を聊か懺悔し又慚愧し得る事に於ておのづから触光柔軟の徳をも賜わりて知らず知らず世といわず世の様に従うべきようにあらしめられつつ生き抜くことが出来た。此事が聊かでも四圍に好結果を生じ得る事と轉ずるのであるまいかと内觀したとき、私の平日生きる爲の善みはもとより私の業報の現れに外なく、所謂田畑に鋤をとり海河に網を引き利を争う商いをもするのですが、その一々の行爲をいよ／＼悲愍し給う大悲心の冥助によつて知らず知らず報謝の大行にまで轉成せしめ給ひつつあるのであつて見れば、何を如何に行うかは人各々の宿業により千差萬別であつても苟もこの業塊が一度體驗信に融化されお念佛に裏付けられて行い得ることとなる上は、それは何であつても悉く佛力の故に念佛の故に報謝行となるのであります。資世産業悉く是れ佛法となり喫茶喫飯皆大悲眞實に淨化されて行く事となりおのづから自利利他圓滿の大行が實現し來る所以でありますまいか。

實に念佛者は無碍の一道であり、天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍すること能わず、罪惡も業報を感ずること能わず、諸善もおよぶことなき大道であり、それ自ら充たされて餘すところなく、全く念佛そのものが行者となり、佛陀の絶對無碍唯一の大道と合一したる境涯となり、人が道であり、道が人であり、無念にあらざる、有念にあらざるに渾然として唯佛陀の一念に生きぬかせて頂くとき、私なく佛なく、又佛ありと申すべき心狀に於て報謝するものと報謝されるものと

仰ぎまじしよろよ慈光(四)

松村繁雄

一八、初日影を仰ぐにつけても

「此里に親の死したる子は無きか、みのりの風になびく人無し」、是は親鸞様の御述懐であると承りますが、まことに、昔も今もその通りであつて、仰ぎ見れば慈光嚴然と輝き給うものを、暗きかげにのみ立ち給う人々のあまりにも多き事よ。「仰ぎ見ればあかあか月は照るものを暗きかげのみなぞ人は行く」。宗教はあれども儀式であり、眞宗はあれども型であり、信仰はあれども迷信ならざるはない——と申しては暴言であらうか。

ともかくも「萌え出るも、枯るるも同じ野邊の草、いづれか秋にわあで果つべき」で、榮華の夢も幸運の誇りも、いまに跡形もなく崩れ去つて仕舞うものを、徒に見樂を張り、勝ち負けに心とられ、慈光はあれども仰ごうとせず、法雨はあれども浸らうとしな

と對立する現象のなきままに唯いよいよ佛陀の慈懷に安んじ大恩を感謝する外ないのでしよう。唯々報謝あるのみであります。つまり念佛は正定業なるが故に直ちに報謝行そのものとなる所以でありましょうか。念佛即正定業即歡佛即懺悔即此土及淨土莊嚴する所以であります。今更乍ら祖聖が唯念佛してと専修專念し給う所以も、いよいよ信解され、獨立の念佛、白木の念佛、一切の功德に勝れたる念佛の妙諦が一層深く渴仰せられるのであります。

「門松は冥土の旅の一里塚うれしくもあり悲しくもあり」、之は一休の歌であるが、この歌も此頃の物質万能の思潮には悲觀的憂鬱な歌として嫌厭せらるるであります。然らば人生問題は物質によつて解決されているのかと申すと、さに非ず、到る所に行き結つて居りながらそれを解決する方法を知らず、行き詰りを行き詰りとさえ氣付かず、目前の私利私慾にだけ狂奔して漫然と人生を苦吟している此頃の世相は、まことに憐れまざるを得ないではありませんか。

何は兎もあれ、新しい年を迎えて皆が「お目出度う」を言い交し

て居りますが、大体新年は何がお目出度いのでありましようか。

「今年こそは……」と、新しい希望を擲んで去年の失敗悔恨を葬つてしまい、羽子にカルタに嬉々として樂しむ子供達のすがすがしい顔を眺めて、なるほど新年はお目出度いには違いない、然し、私共はその新しい希望がどんなものであるかをモウ一度考えて見ねばなりません。去年は赤字であつたが今年も赤字にしよう」と、いろいろ増収を工夫し努力を期して新しい計畫を樹てる！ 之は大切な事であり、「去年はグチをこぼしたが今年も微笑して行きたい」と、理想を新にして精進を心に誓う！ 之もまことに床しい事であり、私共はその希望があればこそ生きる樂しみもあるものであります。さてしみじみ考えて見れば人生は果して赤字であらうか、又、本統に微笑し得るであらうか、私は前號までに其の然らざる事實の一端を告白して皆様と共に人生を泣いたのであります。今新年を迎えるに當つて「更に微笑したくても微笑し得ない人生の現実」を思い起して、「元旦に嬉しきものは念佛かな」の句を思い出し念佛の世界の廣大無邊なるに頭が下り、うれしいのは、目出度いのは念佛だけ、「ともかくも念佛のほかはなかりけり初日の光見るにつけても」と、思はずも口ずさまずには居られないのであります。

一九 流れ行くかも河水のごと

私の家は前を小河が流れていて、私はその清い流れにいつも育くまれ慰められているのであります。私は或日、その流れては去り、去りては流るる水を眺めてふと「明日の夜は淵とも知らず河水は、ただ音立てて瀬を流れ居り」と口ずさみました。水はいつも忙しそくに次へ次へと流れ續けて居りますが、さてどこから来てどこ程の慰めにしかならぬでありましようし、私は、ただ泣いて「コノ娘

へ行くつもりでありましよう？ 私共も悠ばかり考えて忙しい急がしいにただ日を過して居りますが、さてどこへ落付くつもりでしようか。科学する事も必要、文化は更に大切、されど、わが命はどこへやるべきでありましよう？ 「瀬を越えて淵をくぐりてわが命、流れ行くかも河水のごと」、淵をくぐる事は面白からう、瀬を飛び越える事も面白いかも知れない、されど、何のためにどこへ行くのでありましよう。

私は今一人の孫(四歳の娘)を抱えて居りますが、この娘は父は既に死し、母は譯あつて里へ歸り三界に親無しであります。孫は子よりも可愛いもの、況んやこの娘のように生れながらに不運な孫は(人の世に何と云つても親の無い子程食乏はありますまい)私にはふびんで可愛くてたまりません、「父は死し、母は捨つるかいたわしや、我この孫に命ささげむ」とは私の覺悟であります。然し、悲しい事には如何に可愛くてもふびんでも、既に生じている「コノ娘の不運を私はどうしてやる事も出来ません。今は何も知らずにすくすくと成長して呉れますが、やがて大きくなつてから、嬉しい時に「コノ娘に抱いて呉れる父が無い、寂しい時にいさめて呉れる母がないのであります、別けても、物心がついてから「お友達にはなつかしいお母様があるものを、わが母は、なせわたしと一緒に居て呉れないであらうか」と、地上にたつた一人の母に疑問を持たねばならぬようになつた時の、この娘の寂しさはいかばかりでありましよう。この娘はさぞ、悲しみ悩むことでありましようが私にはそれをどうしてやる術もございませぬ。そればかりか、「コノ娘が之から更にぶつつかるいろいろの計り知れない宿命に對して、私はどうしてやる事も出来ません。假りに小鏡を殘して與えたとしても、それ等の悲しみの前にはたとえれば暴風の壁に一枚の戸を廻らすの宿命を見送るより外に道がございませぬ。思えば、「コノ娘も私も

共に宿命のままに、アノ河の流れのようにただ流されて行くより外に全く方途が無いのであります。その、たよりない私でありながら日常の心は！と、考えて見ると、ただ物金のために、見栄のために一ばいであり、忙しいのも金のため、腹の立つのも見栄のため、グチも物故、あせるのも見栄の故、明日にも亡びる我命とも知らずに……「是ではならぬ、もつとおおらかに微笑して」と、いかに努力して見ても努力すればする程どこまでもその醜態を繰り返すより外に在りようのないのが私の現実でございます。「しばらくの命なる夜(世)をなど人は、金ぢや見栄ぢやと夢ばかり見る」

二一〇 何地をさして辿り行くらむ

だが、世には樂天主義と云うのがあつて、「何、人間はこんなものぢや」とうそぶく事を以つて賢明なりとせらるる方もあります。それが果して賢明であろうか。——この事に就ては前號に於て述べましたが、——悪を悪と知らず、迷いを迷いと知り得ずに「見ぬこそ清し」と云うならば私共は何を可言わんや、

然し、ここに慈光に照らされて見れば、我が影の黒きに驚き、今「今年こそ」と新しい希望に意氣込みはすれどその希望のあまりにも頼りなさを悲しまずには居られない。即ち、マメで揃うて働けばこそどうやら生計も立つてあるうが、一朝家族の誰かに病でも起つたらたちまちに生計は破綻し、肝心の療養も意に任せず、一家苦惱のどん底に追い込めらるる事にならうし、心の姿を考えて見ても、時に微笑があるとしてもそれは人様に比較して自分の方が少しでも仕合せである様な場合のこと、若し、我方が少しでも引け目であつたら、「寂しい」と云う思いがニョッコリ頭を上げて来るし、そのようにして、勝つたの敗けたの、よいの悪いのと云うて居る間にも火宅無常の宿命は寸毫の用捨もしないで襲うて来るではありませんか。それでも微笑であろうか、それでも希望であろうか、それでは

満足があり得るであろうか、「今に死ぬ身とも知らずによしあしに、うつつ抜かして今日も暮れぬる」ではないか。

なつかしい母は既に往き、愛しい長男も憐れな孫を残して既に往き、さてこの次は誰の番ぞ、思えば可愛いと云うのも親しいと云うのも今日の命の上のこと、いまにちりぢりに別れねばならぬ宿命の上に晒されているではないか、更に又その互いに悲しみ合つて居る事も、よく考えて見れば己の煩惱の愛着心によつて互いに惜しみ合つて居るグチの變形に過ぎないではないか。私は先般、愛兒を失われた或友人から「右左わきまえずすしたたか一人、何地をさして辿り行くらむ」というお歌をいただいたのであります。いかにも愛兒を思ふ母の切々の情……どのようにしても割り切る事の出来ない恩愛の苦衷……「いつ地をさして辿り行くらむ」とより外には言ひようが無いであります。ところが、「何地をさして辿り行くらむ」は獨り幼兒だけではありませんか、そのような割り切れない苦衷をかかえてただ泣くより外に仕方のないそのお母さんこそ、「何地をさして辿り行くらむ」ではありませんまいか。まことに「火宅無常の世界はよろづのこととらごとたわごと」であるではございませんか。

二一一 わがためにこそ彌陀の涙は

然るに、そのそらごとたわごとの中にただ一人泣くより外に道のない——いづれの行にても生死を離るることある可らざる——私のために、助けんと思召し立ちける御本願でございます。まことに「みだの五却思惟の願をよくよく案するにひとえに繁雄一人がため」といたただくばかりであり、「善導の、自身は是現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた常に沈み常に没して出離の縁あることなき身」と云う金言も身にしてみても、「久遠劫より流轉せる苦惱の舊里は捨て難く未だ生れぬ安養の淨土は戀しからず候ことよくよく煩惱の興盛に候にこそ……急ぎ参りたき心の無きものを殊に憐れみ給うなり」の

聖語と共に、「ただ念佛してみだに助けられ参らすべし」とよき人の仰せを譲りて信ずるより外に別の仔細なきなり」のみ教がしみく、と胸にいたでけるではありませんか。

かくて「ただ一人泣くより外に道もなき我のためにこそ彌陀の涙は」といただいて見れば、「雨も降れ風も吹け吹けしつぽりとみだのみ船に乗せられし身は」と安らわしていただき、再び流れ行く河の水面を眺むれば、「み恵みの海へと急ぐ河水は今日の早瀬も樂しかららむ」であり、「ゴミホコリ抱きかかえて河水の海へ海へとた

入信の経路

私は村一番食しい家に生れ、姉二人は嫁してのち病死して、未つ子であつた私は両親の愛を一身にうけて食しいながら幸福に育つた。祖母は念佛の篤い信者で藁小屋ながら師僧を招いて佛法讃嘆に夜を徹したこともあつた。母も私が十五六歳の頃から非常に佛法を求め遂に無二の信者となられた。そして時々法座を開いては近所の方々と念佛相續していられた。

私が「家が小さく穢いでしよう」と言うと師僧は「念佛のあるところが一番うれしい」と答えられ、父母は「早く大きくなり眞面目に働いて氣兼ねく法座の開ける家を建てよ」と言われたのを覚えてゐる。

又父母は常々、佛法の尊いこと、眞剣に聞かねばならぬこと、二十歳台で聞きひらいて信心の上から存分に働き、有り難い御本を讀

だ急ぐこと」すべてを知らし召し、すべてを抱き給う彌陀弘誓の大海の中にしつぽりと浮ばしていただくばかりではありませんか。

ほればれと念佛せよとやうれしくも

廻り會ひけり新玉の年

お淨土に進む旅路は窓に見る

山の景色も南無阿彌陀佛

(一月一日の朝、四方の戀しき法友の上に思いを走せつつ之を草合掌)

柳川平七

んだり、信の味を詠じたら一番の幸福者だとかどい程にきかされた。

私の青年期は伸び／＼とすぎ所謂模範青年として送り廿一歳の時結婚した。これも親が老人であり、私がつまらぬ道に入らぬようにとの母の願ひからであつた。

私は人らしい家を建て、法座の一席も開いて父母を喜ばせようと考えた。そこで三十歳の頃鐵工所に入り二ヶ年修行して帰つて鍛冶屋を初めた。當事滿州事變後で萬事難儀な頃であつたが仕事に追われ年ら母の心のままに法座は開いた。

社會的にも善行者として認められ、雄辯會にも出、鐵工所も作り、現在の家も建てた。支那事變から太平洋戦争となり軍需品製造に追い立てられたが、敗戦のために工場は焼け衣類も全部焼失し

て、人生のはかなさに気づいたのは四十七歳の暮であつた。

當時から自分に苦になることがあつた。蓮如上人の「當流の肝要は信心一つに定まりそれを知るを門徒とし、知らざるを他門とす」の御言葉である。自分はつとめて眞宗信者らしく振舞うて来たが、それでは駄目である。省みれば模範青年、善人、孝行者と他人から言われて自分は如何にも善人だとうぬぼれていたが、善行の裏には必ず自己中心の醜惡な打算の心がひそんでいることを知り。自分のそうした偽善を人が認めて呉れないと、非常に遺憾に思い恨みに思う、斯うしたことでは自己の橋樑心の増長をしていたばかりであつた。善という美名のもとにかくれて名利の刃を研ぎつつあつたと気がついた。

然し心の何處やらに「善を他人より多くして来た、極重悪人ではない」としか思えなかつた。

亡き母が、「佛法は若い時二十歳台できけ、それをすぎると心が死んでしまつて仲々きけぬ」と言つて呉れたが自分は最早五十に近い上に頭の病氣で聞法していても頭が痛みモウロイとしてしまふ。「無常を引き寄せて聞け」との母の言葉も思い出すが、無常も感ぜられない。

むしろ自分がなまじい善人ぶつた生活のため駄目なのだから大きな逆境に遇つたら聞き得るかと思つたりした。然し逆境に立つた人が必ずしも入信出来るとはいえないのだからそれも駄目である。

丁度昨年の五月慈光誌が出来、山下先生の「簡明なる信仰」を讀んだ時、自分の苦惱の代辯としか思えないので非常に驚き、早速山下先生を常滑の地にお訪ねした。三食の辨當と一升の米とをもつて、非常な決心で御伺いした。

午前午後と私一人を目當に縦横無盡に佛陀の大慈悲の程をきかされた。

ああ自分は墜ちる外にない！ あんなに御法を喜んで死んだ母は今頃どうしていられるであろう、御別れして拾年、一度も母の夢を見たことがない、私は色々と善き先生方から御育てをうけても到底聞けない、分らぬまま死なねばならぬのか、嗚呼「お母あ！助けておくれ！」と心の内に叫んで泣いた。然しいくら喚んでも死んだ母が返事してくる道理もない、只大地が破れて今にも奈落へ墜ち込む様に感じた。泣くにもなげず念佛にすがりました。然し自力の念佛で消え入るばかりである。其利那フト心に存んだのは「しかるに佛かねてし召して煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば」の御文であつた。これは何十邊きいたかわからなかつたが、その時その御文が思い浮ぶと、ああそうだ、私がボヤンリしてキョロンとしてゐる奴なるが爲に、何もかも御承知御見抜きの上の御本願でありましたかと氣付くなり涙と念佛がとどなく流れるのでした。

すると今迄何とかして求めたい、お慈悲を頂きたい、これさえ聞けば死んでもかまわぬといつた方み心を、それにとまらぬ淋しい心、悲しい心がスツカリ消えて、何だか狐にでもだまされた様にボカンとした。これは自分が餘り思ひつめたからこんな不思議な氣持になつたのか、腕をつねつて見たがやつぱり痛い、家に歸つて一夜まんじりともせず、正信偈、御和讃、御文章、先生方の御手紙を閱讀した。その一つ一つが成る程、とうなづかれて来たのは誠に不思議である。夜が明けるなり隣家の有り難い方を訪ねて、一分始終を話すと「でかした〜。そこでです」と答えられてもう嬉しくて心丈夫に念佛申すようになりました。

早速諸先生に御禮の手紙を書き、私一人の山下先生の御座が、御法謝の法縁となりました。思えば私が眞宗の家に生れ、有り難い祖母や父母を持ち、更に善き師にめぐり会つて佛陀の廣大な御慈悲を知らせて頂いたのも皆深い〜御座でありました。五十一歳の今日、人生五十を過ぎた今日、初めて幸福ということを知らせて頂き

れた。絶対の他方で私の全体をよく知悉されての大悲であることも、よろこぶ心も必要でないと知らされ乍ら、解つて解らぬもどかしさ、如何とも爲すこともなく歸宅する外なかつた。

次いで富田の杉村さんの宅で山下先生の御法話會が催され、専心聞いているのだが頭がボヤンリとして矢張どうにもならない。其處では若い娘さんまでが歎び溢れて稱名して居られるのを見て愈々自分のつまらなさ淋しさに歸るばかりであつた。

自分は駄目であるが、この駄目な奴を不憫と思し召された本願であるから、一層念佛一行をと思ひ立つて稱名をして見るものぢきに心は散つてしまつて念佛も消え失せる。

どうにもなれぬ奴を見抜かれての慈悲ときき乍らどうにかなりたいの心は去らず、ああ自分はまだ宿縁が絶無なのか、御説教参りも駄目、いつそ聞かなかつた前がなつかしいと思ふをいうようにまでなつた。

忘れもせぬ昨年七月であつた。山下先生から「君一人の爲めの法座に行く」との御手紙であつた。然し自分は震い上つた。七十にもなられる御老体で列車の事故も多い此頃、草深い田舎まで来て下さるとは何としたことか。然し自分のようなモウロイとした奴ほど御なに聞いても駄目であろうが、若ししたらと思ふ心から、早速待ち申しますと御返事した。御返事はしたもの自分の心が、いよいよわからなくなつた。そして田の草取りをし乍ら、自分は今頃では先生の御法話をきいても先廻りして考えるようになつた。何という傲慢さであろうか、そのくせ聞こうとすればボヤンリする。これではもうどうしても助からない、聞かれない、地獄に行くより仕方がない、切角御出で願つても無駄にお帰しするにきまつてゐる。

した。

それにしても信仰とは自分に何か確かなものを貰うように思つていたことが大きな間違いでした。私は聞く力もない地獄へ墜ちる外ない奴でした。聖人も「地獄は一定住み家ぞかし」と仰せられ「親權においてはただ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをかうぶりに信ずる外に別の仔細なきなり」とこの地獄より行き方のない私共をかねて見抜かれて、不請の友となつて遠い昔からかり果てて下さつてゐる大慈悲を頂かせて貰うばかりでした。

何もなし彌陀にとられて何もなし

南無阿彌陀佛

ニイチエ著、ツアラストラより

御身達は超人を信するといふのか。超人が何だ。

御身達は、御身達自身を見出しもしないで超人を信じたのだ。

世間一般の信者は大体そんなものだ、

だからからきし駄目なのだ。

輯集後記

▲故安波醫學士の信仰体験録から二編を轉載させて頂きました。「全てが肯定される世界」は御自身の死の巖頭に立たれての絶筆であり「妹の死」は安波氏自身の淨土往生の問題の解決の重大契機でありました。

前編が善惡問題の解決、後篇が死の問題の解決とも見られると思います。この人生に於ける二つの重大問題が佛の積極消極の大慈悲一つで完全に鮮やかに氷解していられることは、私共の上によき御訓と存じます。

▲感恩即報恩の山下先生の御原稿は、信仰相続の上に大切な問題を提唱されて、御自身の上に深く体解して下さいました。私共の徳の寶を金言として残して下さいたくせぬが、應揚な頂き方をして寶の持ち腐れと易いものであります。片言隻句もよくよく味わせて頂くとき信味愈々増長させて頂けるのであります。まめやかに。こまやかに念佛相続し、細々に信心の漕をさらえよとの善き師の慈訓を實踐して下さいたのが本稿であります。

▲松村氏の第四回目の原稿は年頭流來流去、無常轉變の姿を靜観されつつ、はてしなき

生死の苦海に大悲の願船に乗せられる喜びを述べられました。同氏は山口縣と島根縣方面で信一つの歩みを続けられ、信の友を各地に見出されて居られます。

▲柳川平七氏の入信の経路は文字通り遠く宿務を慶ばれたものであります。いたつてやわらかな水がいたつてかたい石に穴を穿つように、佛の大慈悲の自然の徹到であります。

筆者の住所照介

故・安波勳八先生 大分縣別府市鐵輪

山下成一先生 愛知縣常滑町市場

松村繁雄氏 山口縣仁保局區仁保

柳川平七氏 三重縣桑名郡城南村

▲ ▲ ▲
本号で通算十二号となり滿一ヶ年の刊行を不思議にも続けさせて頂きました。今後力限り続けさせて頂き信のよき友となりますようにと念じて居ります。

二五、二、一四、花田記

昭和二十五年三月十日印刷
昭和二十五年三月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價 一部金拾五圓(郵稅共)
一年分金百八拾圓(郵稅共)

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九

編集兼 花田 あや
發行人

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷人 本 伍 郎

名古屋市千種區千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區內幸樂町二ノ二九

花田正夫方

發行所 慈光社

振替口座番號 名古屋一〇四七〇番

慈光第二卷第三號 昭和二十五年三月十五日發行 (毎月一回十五日發行)

昭和二十四年七月二十三日 第三種 郵便物認可